

福井県若狭町熊川宿における水利用とまちづくりに関する研究

田口 智大^{*1}, 市川 尚紀^{*2}

A Study on Water Use and Town Planning in Kumagawajuku, Wakasa Town, Fukui Prefecture

Tomohiro TAGUCHI^{*1}, Takanori ICHIKAWA^{*2}

In recent years, rapid urbanization, a declining birthrate and aging population, and progress in environmental problems have led to the need for sustainable urban development. Under these circumstances, historical villages and townscapes that remain throughout the country, such as castle towns and post towns, have been preserved, and urban development has begun to attract attention nationwide. Kumagawajuku, Wakasa Town, Fukui Prefecture, is a post town that has achieved economic development since the early Edo period, mainly by wholesalers who have done various jobs such as lending and borrowing funds, and moving people and horses in and out, mainly by handing over goods by people and horses. It is one of the few areas in Japan where an irrigation canal called the Maekawa River flows, and various types of buildings form a townscape. The purpose of this study is to grasp the history and current status of Kumagawajuku town development, the current state of the waterway network and water conservancy facilities, and to consider the relationship between waterways and town development, and to create useful materials for future town development.

Keywords: Kumagawajuku, Water Network, Water Use System, Town Planning, Important Traditional Buildings Preservation District, Vacant House Problem

1. はじめに

大都市圏周辺では、人口が増加し土地の価値が高まるため、伝統的な建物や町並みが解体され、高層ビルや現代的な建物が建設されることが多くなった。一方、地方都市は、少子高齢化による人口減少が進み、経済活動の縮小や地域コミュニティの崩壊が問題視されている。この問題により、空き家の増加、医療や福祉サービスの維持が困難な地域も多く見られる。人口減少により町の維持が難しく、古い建物の修繕や保存にかかるコストが高くなり、管理が行き届かなくなるため、老朽化して取り壊されるケースが増えており、歴史的な町並みは年々減少している。こうした背景のもと、近年は持続可能なま

ちづくりが求められている。

国の法制度をみると、1975年の文化財保護法の改正によって「重要伝統的建造物群保存地区（1975）」の制度が開始され、城下町、宿場町など全国各地に残る歴史的な集落や町並みが保存されるようになった。また、地域に点在する遺産を活用、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている「日本遺産（2015）」などの認定制度、さらに、まちづくりに関する大臣賞なども創設され、全国的にまちづくりが注目されている。このような伝統的な町並みを保存・活用していく動きが活発になる中で、重要伝統的建造物群保存地区の一つである福井県若狭町熊川宿は、前川と呼ばれる「平成の名水百選」に

原稿受付 2025年6月2日

^{*1} 近畿大学大学院 システム工学研究科 システム工学専攻 博士前期課程（〒739-2116 東広島市高屋うめの辺1番）
（現所属：株式会社大林組）

^{*2} 近畿大学工学部 建築学科 教授、次世代基盤技術研究所 教授（〒739-2116 東広島市高屋うめの辺1番）
連絡先：市川尚紀（研究代表者）

E-mail ichikawa@hiro.kindai.ac.jp

DOI: 10.15100/0002003193

選定された用水路が流れ、様々な様式の異なる建物により町並みが形成されている全国でも数少ない地域である（写真 1）。



写真 1 熊川宿の町並み

熊川宿に関する研究は、水路や住宅の構造⁽¹⁾⁽²⁾、町並み相談員制度⁽³⁾、防災に関する研究⁽⁴⁾が行われている。しかし、全国でも数少ない歴史的な町並みが残る町にもかかわらず、熊川宿の水利用・まちづくりに関する研究は 1986 年以降、37 年間行われていない。そこで本研究では、福井県若狭町熊川宿における水路網、前川に存在するかわとの利用実態を把握するとともに、熊川宿のまちづくりの経緯と現状を把握する。また、熊川宿に流れる前川と呼ばれる用水路の踏査や水文環境調査、まちづくりの経緯などをヒヤリングし、時系列に整理、考察することで、今後のまちづくりの有用な資料を作成することを目的としている。

2. 調査概要

本研究の対象地となる熊川宿は、福井県三方上中郡若狭町熊川に位置している。熊川宿の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている範囲は、若狭街道の旧宿場の大部分を占める約 1.1km、幅 100m の範囲であり、東から上ノ町、中ノ町、下ノ町で構成されている（図 1）。江戸時代初期より人馬による物資継立てを主として、資金の貸借、人足・馬方の出入などの諸般の仕事をした問屋が中心となり、経済的発展を遂げた宿場町である。もともとは 40 戸ほどの村であったが、後に 200 戸を超える町へと発展している。しかし、1918 年の国鉄小浜線が開

通すると、街道で運ばれる物資が少なくなり、徐々に衰退していった。

本研究では文献調査と現地調査を実施し、現地調査では、踏査、マッピング（水路網の全貌、水系の種類）、実測調査（水文環境）、ヒヤリング調査（重伝建に至る経緯、まちづくりの経緯、かわとの現状）を実施した（表 1）。

3. 水路の形成過程と変遷

3.1 前川の歴史

熊川宿の街道沿いには前川と呼ばれる「水の郷百選」「平成の名水百選」にも選定された水路がある。前川は年間を通して安定した水量を保つ水路であり、住民に長年親しまれてきた。

前川は天正年間（1573～92 年）に上ノ町、中ノ町に設置され、牛馬の飲み水などとして使用されていた。寛文年間（1661～73）には、町並みの途中で放流していたものを下ノ町まで延長し、灌漑用水などにも利用されるようになった。

1996 年に熊川宿が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、同年には景観整備も始まった。景観整備は電柱電線の地下埋没やセットバック、地道風舗装、さらには前川のコンクリート護岸だったものが地元の石材を使った石積みの護岸に改修された（写真 2）。1999 年には中ノ町、2005 年には上ノ町、下ノ町の景観整備が完了した。



写真 2 護岸工事前後⁽⁵⁾

3.2 水路の実測と水質調査

前川は、上ノ町に流れているものと、中ノ町・下ノ町に流れているもので取水が異なっている。熊川宿の周りには北川、天増川、河内川といった河川が流れており、上ノ町の前川は天増川、中ノ町・下ノ町の前川は河内川から取水されている（写真 3、4）。



写真 3 上ノ町前川の取水



写真 4 中ノ町・下ノ町の取水

表 1 調査概要

方法	調査項目	調査対象	日程
踏査 マッピング	・水路網の全貌 ・水系の種類 ・熊川宿の町並 ・熊川宿周辺の環境	熊川宿全域、熊川宿周辺地域	2023.8.15 ～8.18 2024.8.27 ～8.29
実測	・水文環境（水路の幅、水深、流速、素材など）	調査地点 A～I	2023.8.18 2024.8.27
ヒヤリング	・重伝建選定の経緯 ・まちづくりの経緯 ・かわとの利用目的	若狭町歴史文化課 熊川宿まちづくり特別委員会会長 株式会社 DEKITA 代表取締役 熊川宿の住民	2023.8.16 2023.8.17 2024.8.28
文献	・熊川宿の概要・歴史	文献 (1) ～ (10)	2023.6 ～2025.12



図1 熊川宿の主要施設^{注1}

上ノ町の地点を3ヶ所(天増川からの取水) , 中ノ町・下ノ町の地点を6ヶ所(河内川からの取水)において素材、流速、幅、水深、水路深、気温、湿度、水温、流量の実測、水質調査(COD, pH, BOD)を行った(図2)。

以下、9ヶ所の実測、水質調査結果(2023年時水質調査は、調査中の降雨により調査を打ち切ったため、対象を6ヶ所とする)を表2～4に示す。A地点以外は1996年の護岸工事により石積み護岸となっている。主要な通りではない路地の水路であるH・I地点は水路幅・水路深が小さくなるにつれ、流速・流量が小さくなっている。

水質調査では、2023年時はE・F、2024年時はEの地点のBOD(生物化学的酸素要求量)の値が他の地点より高いことが分かった。さらに、目視で確認した場合にも、上ノ町の前川よりも中ノ町・下ノ町の前川の方が少し濁っていることが確認できた(写真5)。これは2019年に竣工した河内川ダムの建設による水質汚染の影響からと考えられる。



図2 水路の実測・水質調査地点^{注1}

表2 実測結果

地点	素材	流速(m/s)	幅(m)	水深(m)	水路深(m)	気温(℃)	湿度(%)	水温(℃)	流量(m ³ /s)
A	コンクリート	1.06383	0.6	0.17	0.59	32.8	67	21.8	0.108511
B	石	1.315789	1.08	0.1	0.7	31.5	71	21.8	0.1422105
C	石	0.753769	1.1	0.11	0.84	28	84	21.9	0.091206
D	石	0.84507	1.1	0.13	0.8	29	72	21.3	0.120845
E	石	1.107011	1.2	0.27	0.64	29.2	72	21.9	0.358672
F	石	1.327434	1.06	0.20	0.76	28.5	75	22	0.281416
G	石	1.2711865	1.05	0.13	0.8	29.4	72	22.1	0.173517
H	石	0.579151	0.35	0.03	0.2	29.7	71	22	0.006081
I	石	0.348432	0.45	0.03	0.55	30.4	70	22	0.004704

表3 水質調査(2023)

地点	COD(mg/L)	pH	BOD(mg/L)
A	5	7	0
B	5	7	0
C	5	7	0
D	5	7	0
E	5	7.5	10
F	5	7.25	10
G	5	7.5	0

表4 水質調査(2024)

地点	COD(mg/L)	pH	BOD(mg/L)
A	5	7	0
B	5	7	0
C	5	7	0
D	5	7	0
E	5	7.5	10
F	5	7.25	0
G	5	7.25	0
H	5	7	0
I	5	7	0



写真5 濁った前川

3.3 かわたの分布

前川には「かわと」と呼ばれる石組の洗い場がある。かわとは1985年の日本ナショナルトラストの調査時に

は53ヶ所、1996年の重伝建選定時には55ヶ所であった。1999年に行われた護岸工事の際に中ノ町に2ヶ所のかわとが復元され（写真6、7）、それにより2024年8月時点の熊川宿のかわとは57ヶ所である（図3、4）。

中ノ町には、住宅の中まで水が引き込まれる造りのもの、下ノ町には民家の裏側に存在するものなど、様々なかわとが存在する。



図3 かわとの分布^{注1}



図4 復元されたかわとの分布^{注1}

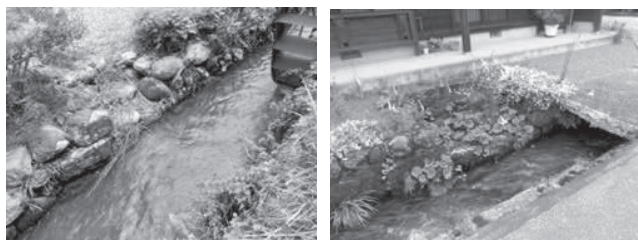


写真6 復元されたかわと 1 写真7 復元されたかわと 2

3.4 かわとの利用目的とこれからの活用

住民ヒヤリングと文献調査から、かつては米や野菜、什器を洗うこと、芋洗い機、洗濯、水遊び、洗顔、手足を洗うこと、融雪などに利用されていたことがわかった。現在では、打ち水や花の水やり、洗車、融雪、ペットボトルに入れたお茶を冷やすことなどに利用されていることがわかった（写真8、9）。過去と現在を比べると、野菜や食器洗い、融雪は共通しているが、洗濯などは行われておらず、水道設備や家電製品の普及により前川の利用は減少している。前川をまったく利用していない住民もいた。しかし、過去には無かった洗車やペットボトルに入れたお茶を冷やすなどの利用もみられる。

日常生活によるかわとの利用は減少したが、熊川宿全体では新たな活用がみられ、小水力発電やブリキの金魚レースが行われている（写真10）。さらに、魚の放流やライトアップ、水車の設置などによって前川をもっと活かしたいという住民の声もあり、熊川宿の前川を活用したまちづくりへの意欲がうかがえる（写真11）。



写真8 飲み物を冷やすための籠



写真9 融雪の様子

（提供：熊川宿まちづくり特別委員会会長）



写真10 小水力発電



写真11 水車

4. まちづくりとの経緯と現状

熊川宿のまちづくりについて文献調査、ヒヤリングを行い、まちづくりの経緯と現状を整理した（表5）。

4.1 重伝建選定の経緯

4.1.1 町並み保存と住民の誤解

熊川宿の歴史的価値は福井大学の福井氏らにより発見された。1981年、福井大学による町並み保存対策調査が実施され、「若狭街道の宿場熊川」という報告書が完成し、全ての建物に関する基礎的資料が整えられた。同年、旧熊川宿町並みを守る会が発足し、1983年には、重伝建選定を前提とした保存条例案・保存計画案の制作、熊川宿町並み保存委員会が設立し、熊川宿の町並みを保存していくという動きが始まった。しかし、この一連の流れは、建物の保存にのみ光があたり、住民からは「家には釘一本打てない、庭木一本切れない」という誤解が生まれた。実際には景観を保存する条例・計画案のため内装などの自由は効くが、一度生まれた誤解から、住民の町並み保存への意識は日に日に冷めていった。さらに1985年、日本ナショナルトラストによる調査が西村幸夫氏を中心に地元の小学生と共に行われ報告書ができた。しかし、1983年の調査を含め、二度の大きな調査があったにもかかわらず、重伝建選定には至らなかった。若狭町歴史文化課のN氏は、「この時期は住民にとって、重伝建選

定が目的化して映っていた」⁽⁵⁾と語っている。

4.1.2 保存からまちづくりへ

重伝建選定に至らない熊川宿において、1991年に転機が訪れる。6年前の調査以来、再び西村幸夫氏が指導とともに講演に訪れた。1992年には日本ナショナルトラストの「町づくりネットワークの推進事業」により、西村氏らのさらなる指導が行われた。これを機に「町並み保存からまちづくりへ」という新たな考えが生まれ、住民と行政の共通理念として新たな運動へとつながっていった。

4.1.3 新たな問題と重伝建選定

一方で1993年、熊川宿において位置的にも歴史的にも重要な建物であった逸見勘兵衛家の側面が倒壊した。これは熊川宿にとって大きな試練であった。しかし、所有者の逸見諒氏の意向と住民の思いから逸見家を残して、こうという動きになる（写真12）。さらに、修理の方法として、壊して復元新築を行うのではなく、外観は古い民家のまま、内観は現代的に住むことができるモデルハウスにしていくことになった。この動きは、現在の熊川宿のまちづくりにおいて決定的な方向付けとなる。1995年には、熊川宿町並み保存委員会が若狭熊川宿まちづくり特別委員会へと名前を変え、熊川宿は保存からまちづくりへと動き出していく。そして1996年、熊川宿は重要伝統的建造物群保存地区に選定される。さらに、旧建設省の歴史国道、国土庁の水の郷百選にも選定され、建築、街道、水路というそれぞれの観点において国から重要とされた。住民のまちづくりへの意識は、同時期の3つの選定により、大きな追い風となった。



写真12 旧逸見勘兵衛家住宅改修前後⁽⁵⁾

4.2 重伝建選定後のまちづくり

4.2.1 景観整備

重伝建選定後、1996～2005年にかけて一般民家の修理や道路の舗装、前川の護岸工事などの景観整備が始まった。さらに、道の駅や公衆トイレの建設などの公共的整備も進んでいった。また、元は熊川宿の役場であった建物を改修した「若狭鯖街道熊川宿資料館」の開館、「若狭熊川番所」の復元など、公開施設も建設された。

4.2.2 祭事によるまちづくり

1772年、白石神社の屋根の葺き替えや上屋の竣工記念

として山車が造られた。しかし、1846年の大火の影響で山車は焼失、さらに天保の飢饉で祭りどころではなくなった。山車は、その後三基あったものを一基のみ復活させたが、これも1963年を最後に途絶えてしまった。しかし、2002年に国のふるさと文化再興事業により、再び一基の山車と見送り幕一枚が復元された。

1998年、若狭熊川宿まちづくり特別委員会が京都の一乗寺郷土芸能保存会との交流により、80年ぶりにてっせん踊りが復活した。この踊りはかつて京都から熊川に伝わり、大正時代には廃れてしまった踊りである。2000年には、熊川いっぷく時代村などの数々のイベントが開催された。いっぷく時代村はリピーターが多く、町内をはじめ、県内外から毎年訪れる観光客も多い。このイベントでは、上記の山車や見送り幕などが象徴となり、前川を利用したブリキの金魚レース、子供の語り部などが行われている。開催するにあたっては、いっぷく時代村実行委員会が発足し、以後毎年開催（コロナ期間を除く）されている。このイベントは熊川宿にとって単なる催し物ではなく、住民が一丸となって取り組むことで、世代間の交流が深まり、さらに人材育成の場としても機能している。今や熊川宿にとって欠かせない存在となっている。

4.2.3 国際交流

2004年、2005年の2度にわたりブータン王国と文化交流が行われた。ブータンは城砦や仏教寺院等、ブータン特有の歴史的建造物が大切に保存されてきた。しかし、ブータンにおいても近代化が進み、歴史的建造物が建て替えられる傾向にあった。そこで、ブータンの寺院や民家の維持管理を担う住民が文化財保護の意義について考え、意見を交換する機会としてエッセイコンペティションが2002年に企画された。翌年には文化庁建造物調査官との話し合いが行われ、熊川宿が交流の場として推薦され、ブータンの人々が訪れた。熊川宿が選ばれた理由は、この地域が重伝建であること、住民主体の保存活動が活発に行われていることが評価されたためである。

2003年、二度の交流に先立ち、現若狭町歴史文化課のN氏はブータン王国に訪れている。後にN氏は「ブータンと熊川宿の出会い、従来の熊川の住民によるまちづくり活動の延長線上にいただいた、たいへん貴重なこととして、真に感慨深いものである」⁽⁵⁾と述べており、この交流は熊川宿におけるまちづくりの一つの重要な出来事であると考えられる。

4.2.4 防災によるまちづくり

熊川宿では防災活動にも力を入れており、2009年には「伝建地区若狭町の防災まちづくり計画」が策定された。これにより熊川宿防災まちづくりシンポジウムが開催さ

れ、同年には熊川宿自主防災会が発足した。翌年には熊川宿自主防災デーが実施され、現在でも続く住民参加の防災訓練となっている。さらに翌年 2011 年には、近隣火災通報システム整備が完成した。このシステムは火災を検知した場合、火災が発生していない近隣の住戸に設置されている火災報知器も連携して作動するというもので、初期消火の強化につながった。これらの防災活動から、2012 年には熊川区自主防災会が防災まちづくり大賞を受賞した。こういった防災活動から、重伝建を住民自らの手で守っていくという意志が感じられる。

4.3 現在のまちづくりと空き家問題

4.3.1 空き家問題

熊川宿では、これまでのさまざまな取り組みにより、景観保存が積極的に行われてきた。その一方で、建物の所有者が遠方に居住している場合や経済的な問題で、劣化したまま修繕がされていない建物も多く見られる。そこで、熊川宿ではさまざまな空き家対策が行われている。2012 年、熊川宿では、空き家を活かした移住推進事業が開始され、続いて熊川宿空き家再生フォーラムが開催された。また、2017 年には第三次熊川まちづくりマスタープランが策定され、少子高齢化・空き家問題に対する計画がなされた。熊川宿は当初のまちづくり以来、観光地化を望んではこなかったが、空き家、人口減少の影響により、まちづくり特別委員会の会長は観光客を積極的に呼び込むことを決めた。しかし、これはいわゆる観光地化ではなく、熊川宿の住民が行うまちづくり活動を、訪れる人々と共有することを重要視し、「まちづくり」という基本理念を失うものではなかった。

4.3.2 新規雇用

2018 年、株式会社 DEKITA 代表取締役が民家活動の拠点として、シェアオフィス菱屋（写真 13）をオープンし、2019 年には会社の基盤を東京から熊川宿へ移した。シェアオフィス菱屋は熊川宿の中心にある築 130 年の古民家をシェアオフィス、レンタルスペースなどからなる複合施設へとリノベーションしたものである。2019 年には、八百熊川 SOL, S COFFEE、2020 年には八百熊川ほたる（写真 14）がオープンしている。八百熊川ほたるは、文化体験ができる古民家宿泊施設となっており、ほたるに続いて、八百熊川ひばり・つぐみ（2021 年）、八百熊川やまね（2022 年）がオープンしている。この 4 つの施設はそれぞれの建物の良さを活かしながら、地域の伝統を味わう御膳の提供、かまどを使う体験などが行われている。このような株式会社 DEKITA の空き家活用の取り組みは、観光地化を前面に押し出した事業ではなく、熊川宿従来の取り組みである「まちづくり」を十分に理解

し行われたものであった。



写真 13 シェアオフィス菱屋 写真 14 八百熊川ほたる

4.3.3 新たな取り組み

2024 年、株式会社 DEKITA によって、空き家活用に続く新たな取り組みとして、「山座熊川」がオープンした。山座熊川は熊川宿南西の山にある、キャンプや BBQ、アクティビティなどができる幅広い宿泊施設である。「山座熊川 camp&stay」では、一棟貸しホテルでの宿泊、専用の水回りがついたオートサイトでのキャンプ、日帰りのバーベキューなどを楽しむことができる複合型アウトドア施設である。「山座熊川 OUTDOORS BASE」は、サップやカヤックなどの湖上アクティビティ、トレイルハイクやグラベルバイクなどの山のアクティビティまで体験できる施設である。このように、山座熊川は熊川宿周辺の自然環境と調和しながら山で暮らすことをコンセプトとしている。株式会社 DEKITA 代表取締役の時岡氏は「山と宿場をセットで使う、山と里を両方活かす。」と語っており、熊川宿のまちづくりの新たな取り組みとして期待されている。

4.4 まちづくりに対する住民の意見

熊川宿の住民に、これまでのまちづくりをどのように考えているのか、これからのまちづくりに期待することをヒヤリング調査した。

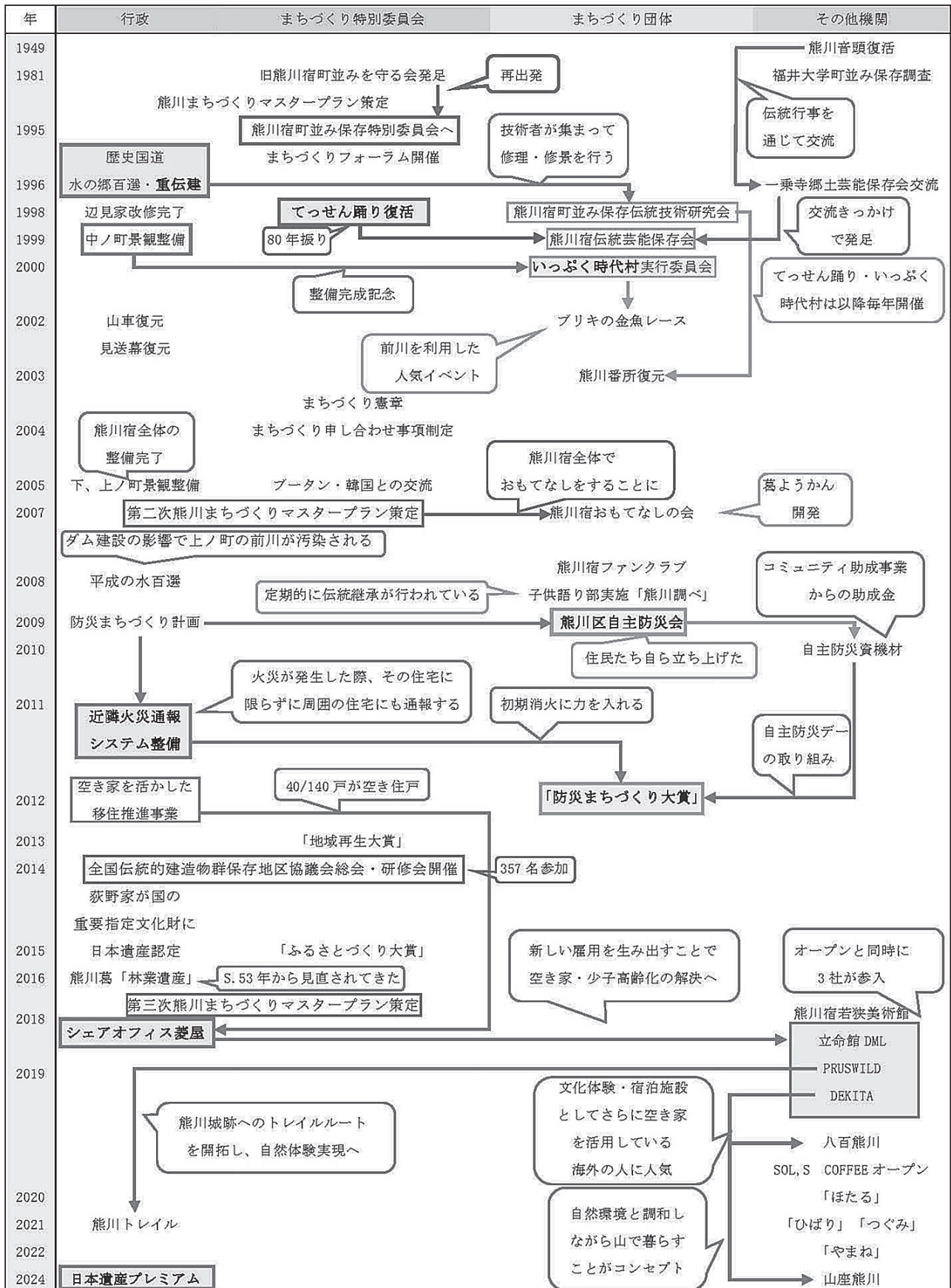
これまでのまちづくりについては、「ありがたい」や「頑張っている」という好意的な意見とともに、「洗たく物を表に干せない」や「住むのには良いが商売には向かない」などの意見もあった。さらに、「住民が利己的で、まち全体のことを考えていない」といった住民の意識に対する意見もあった。これからのまちづくりに期待することについては、「若い人が移住してきてほしい」という意見が多かった。さらに、土日祝日や祭りの日の賑わいはあるものの、平日は人通りも少ないため、賑わいを求める声もあった。

これまでのまちづくりにはポジティブな印象があるものの、人口減少などによる空き家問題への意識も垣間見えた。

5. まとめ

熊川宿では、水利施設であるかわとは 57 ヶ所存在して

表5 熊川宿のまちづくり略年表



いることがわかった。ライフスタイルの変化から、前川での洗濯などは行われなくなったが、野菜を洗うことや融雪での利用は現在でも行われている。また、かわとの利用頻度は減少したものの、前川を利用したまちづくりが今もなお行われていることがわかった。

まちづくりにおいては、福井大学による町並み保存対策調査から始まり、住民の誤解や逸見勘兵衛家の倒壊などを経験しながらも、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。重伝建選定後においても行政はハード面、住民はソフト面からまちづくりに取り組んだ。代表的な取り組みとして、てっせん踊り、いっぷく時代村などの祭事運営、自主防災デーの開催・近隣火災通報システム設置等の防災活動が行われている。現在でも空き家問題は解消しておらず、住民の高齢化などからも空き家が増えることが見込まれる。引き続き空き家解消に向けた新規雇用の受け入れ・文化体験施設・宿泊施設等のまちづくりが行われていく必要があると思われる。

参考文献

- (1) 西村幸夫, ほか4名: 福井県熊川宿の構造とその変容に関する調査研究その1〜5, 日本建築学会大会学術講演梗概集(1986.7), pp.131-140
- (2) 吉田純一: 若狭熊川宿の荻野家住宅, 日本建築学会大会学術講演梗概集, No.9261(2011.8), pp.521-522
- (3) 浦山益郎: 重要伝統的建造物群保存地区の現状変更に関する町並み相談員制度の運用実態ー福井県若狭町熊川宿重要伝統的建造物群保存地区を事例としてー, 都市計画論文集, Vol.50, No.3(2015.10), pp.1084-1089
- (4) 福永靖史: 避難所設備の評価に基づく寺院・公益施設の活用可能性に関する研究ー福井県若狭町熊川宿重伝建地区を対象としてー, 歴史都市防災論文集, Vol.12(2018.7), pp.177-184
- (5) 永江寿夫: 町並み保存と創造若狭熊川宿に学ぶ実践と理念, 祐山閣(2022.8)
- (6) 福井県若狭町歴史文化課: 若狭鯖街道熊川宿の町並み保存IV5年間の歩み2011〜2015(2017.3)
- (7) 福井県若狭町歴史文化課: 若狭鯖街道熊川宿の町並み保存V5年間の歩み2016〜2020(2022.3)
- (8) 熊川区: 第二次熊川まちづくりマスタープラン報告書(2007.3)
- (9) 熊川区: 第二次熊川まちづくりマスタープラン報告書(2018.3)

(10) 上中町: 若狭街道の宿場熊川福井県遠敷郡上中町熊川伝統的建造物群調査報告書(1982.3)

注釈

注1 基盤地図情報(国土地理院)を加工して作成

謝辞

本研究は、令和6年度 東広島市×近畿大学 Town&Gown COMMON プロジェクト「学校と地域がつながる JR 西高屋駅周辺のまちづくり」の受託研究(代表者:市川尚紀)として行なったものである。

また、現地調査を行うにあたり、ご協力いただいた若狭町歴史文化課永江寿夫氏、若狭熊川宿まちづくり特別委員会会長、株式会社デキタ代表取締役、熊川宿住民の皆様へ感謝の意を称します。なお、踏査、実測調査とヒヤリング調査にあたっては、当時学部生であった山本樹君、土井誠斗君、大学院生であった植田ヒカリさんに協力していただいた。